

Close-up Interview (9月号 表紙の顔)

桑藤 美樹 MIKI KUWATO

「今思うと、あと10年早く
ボウリングを始めたかったですね」

33歳と遅いデビューながら8年間で3度優勝を果たしている桑藤プロだが、永久A級ライセンスのかかった5年目の成績が振るわず、無念のシード落ち。それでも昨年はプリンスカップでの準優勝を含めて3大会で上位入賞し、1年でシードプロに返り咲いた。仕切り直しの今季はコロナ禍で早々にツアーが中断してしまったが、10月からの再開が決定。個性派サウスポーは「10年で5勝」というデビュー以来の目標達成を諦めずに追い求める――。

Photo: 福地和男



――桑藤プロは33歳と遅いデビューですが、いつごろボウリングを始めたのですか？

桑藤 本格的に始めたのは27、8歳くらいですね。それまではたまに遊びに行くくらいで。子どものころも家の近くにボウリング場がなかったから、両親にクルマで連れて行ってもらって年に1、2回行くか行かないかでした。

――学生時代にスポーツは？

桑藤 中学時代はソフトボールでピッチャーをやっていました。父が野球好きだったのですが、ウチは2人姉妹で(苦笑)。男の子がいたらたぶん野球をやらせていただろうなという思いもあってやっていました。

――では、高校でもソフトボールを？

桑藤 ソフトボール部はあったんですが、髪をショートにしななければいけないという規則があって、それがイヤで入りませんでした(笑)。

――体育の授業の成績は？

桑藤 よかったです。私のころはまだ10段階評価だったけれど、苦手な持久走があるときだけ9、それ以外はずっと10でした(笑)。

「プロテストを受けるのは1回限り」と決めていた

――話を戻して、本格的にボウリングを始めたきっかけを教えてください。

桑藤 友だちとラウンドワンさんに遊びに行ったとき、3回とか5回投げに行くと1980円でマイボールが作れるというキャンペーンをやっていたんです。一緒に行った友だちはすでにそのボールを持っていて「私もほしいな」と(笑)。ボールをもらってからは、シューズと一緒にセンターのロッカーに保管して、ヒマがあるとみんなで投げに行っていました。スタートはそんな感じですね。

――競技会に参加するようになったのは？

桑藤 ある日、たまたまその

ラウンドワンに投げに来ていたご夫婦がNBFの会員で「うちの月例会にフリーで参加できるので、行って見ない？」と声をかけられて、池袋のハタ(ボウリングセンター=2011年閉鎖)に行くようになったのがきっかけです。



女子のサウスポーのなかでも投球フォームは独特、俗にいう「猿腕」でバックスイング時にボールが背中に入るのが特徴だ

――アマチュア団体の会員ボウラーに声をかけられたというのは、すでに当時それなりの腕前だったのですか？

桑藤 ですかね(笑)。下手投げのソフトボールの感覚と、そんなに違わなかったんです。でも、ちゃんと投げられるようになったのは、やっぱりハタで梅田寿雄プロ(22期/11年没)と出会って、教わるようになってからです。

――梅田プロはどんな師匠でしたか？

桑藤 優しくかったですね。コーチとしては、一度にあれこれ教えるのではなく、一つのことができるようになるまでは次のことを教えてくれない。毎日ハタに行けるわけではないので、地元のセンターで練習するときはそれを動画に撮って見てもらっていました。

――プロになろうと思ったのはいつごろですか？

桑藤 45期のテストを受ける

1年前です。当時は医療事務の仕事をしていたのですが、梅田プロに相談して「だったら1年かけて準備していこう」と。でも、秋に突然亡くなってしまって…。当時はアマチュアも出場できたラウンドワンカップに私も出ていて、帰ってきた矢先のことでした。

――それでもみごと一発合格。テスト中は梅田プロの遺影を持ち歩いていたそうですね。

桑藤 はい。師匠の写真を道具箱に忍ばせていました。年齢的なこともあって、プロテストを受けるのは1回限りと決めていたので、合格できてホッとしました。

――本格的に始めて、5年でプロになったのだからすごい。

桑藤 今思うと、あと10年は早く始めたかったですね。

――ちなみに、アマチュア時代の成績は？

桑藤 私もNBFに入会しているいろいろな大会に出ていましたが、シングル(個人戦)では全国大会に行けなくて、ダブルスで出たときも、成績は下から数えたほうが早かったです(笑)。ハタがウッドレーンだったせいか、それ以外の材質のレーンでは苦戦していました。初めて300点を出したのもウッドレーンの東京ポートボウル。ダブルスの東京都予選でした。

ゾーンに入った!?
16年プリンスカップ決勝

――プロ入り後は8年で優勝3回。初優勝はプロ3年目、2014年の六甲クイーンズオープンでした。

桑藤 六甲では1年目にもラウンドロビンまでいきました。たぶんその当時のほうがボールスピードが遅くて、ちょうどよかったんだと思います。当時は今より10kg以上痩せていて、体重が増えるにつれて球速もアップしていったら、逆に予選落ちするようになった(苦笑)。ユニフォームのサイズはずっと変わっていないんですけどね。

――16年にはラストチャンス
の新人戦に優勝しました。

桑藤 会場が(所属する)スポーツ時代の浦和国際ボウルで、アマチュア時代にも出ていたから、新人戦のキャリアは長いんです(笑)。社長には3年目くらいから「そろそろだね」とプレッシャーをかけられていました。

――その年の暮れにはプリンスカップでも優勝。決勝は宇山侑花プロ(48期)と280:279という、ものすごい試合でした。

桑藤 終わったとき、過呼吸で倒れそうでした(笑)。表彰式をRankseekerさんが中継していて、後で見たら石井利枝さん(1期/JLBC会長)に体を支えてもらっていました。

――ともにセミパーフェクトの打ち合いなんて、そうそうないですからね。

桑藤 そのときの感覚が、六甲で初優勝したときとよく似ている、はっきりとストライクコースが見えていました。この感覚が、他競技のアスリートの方がよく口にする「ゾーンに入った」ということなのかな?と、後になって思いましたね。

“金枠”は逃すも
1年でシードに返り咲き

――ランキングを振り返ると、初優勝の翌年に第1シード入りしています。

桑藤 そこから4年間第1シードを守ったのですが、金枠(永久A級ライセンス)がかかった5年目に落ちてしまって…。シードだと選抜大会や順位戦で投げないので、予選落ちが続くと200アベを超えてもゲーム数が足りなくなるんです。

――それでも、昨年は後半戦の3大会に入賞して、1年で第1シードに返り咲きました。

桑藤 補助器具が禁止になる1年前にメカテクを外して、素手

でシードに戻りました(笑)。アマチュア時代、15kgのマイボールを持ったときからメカテクを着けていたので、最初は投げられるのか心配でしたが、意外と普通に投げられましたね。

――桑藤プロはデビューが遅かったぶん、一つひとつの試合を大事に戦っていきこうという気持ちが強いのでは？

桑藤 それはありますね。大会のスケジュールに合わせてコンディションを上げていくことは常に意識しています。

――再出発の今季はコロナ禍でツアーが早々に中断。今後予定通り再開されたとして、新人戦を除くと、女子は10月の六甲クイーンズから年内7大会です。

桑藤 個人的には10年で5勝するのが目標です。去年の東海オープン(6位)とプリンスカップ(2位)はチャンスだったので、そこを取り切れなかったのは痛かったですね(苦笑)。

――猶予は来季まであります。「最後まで諦めない」がモットーですよ？

桑藤 そうですね(笑)。チャンスがきたら、それをしっかりとつかみ切れるようにしたいです。これだけ試合間隔が開くのは初めてなので、試合勘が鈍っていないか心配ですが、それはどのプロも同じ。頑張ります!



くわとう・みき/1979年5月6日生まれ、埼玉県出身。左投げ。血液型A。2012年プロ入り(45期/ライセンスNo.494)。優勝3回。昨年度ポイントランキング15位、アベレージ205.32。株式会社スポーツ所属。